『新・おねーさんの耳はロボの耳３』

著作：ａｓｈ

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元にしています。

来栖川電工製メイドロボットＨＭ17型「Celio　セリオ」。
ただ一体のみの製造で、正式な型番を持つ割にはそれについての記載はほとんどない。
（ちなみに、ＨＭ13型「Serio」に極めて似た外観を持つが、根本的にはまるで違うタイプ）　これが、本作品の主役であるセリオの素性である。結構知られていないが、セリオの性能は極めて高い。
　この『新ロボ耳』シリーズは、そんなセリオの高性能ぶりをご覧頂くものである…わけはなく、何はさておき、セリオとマルチと浩之の織りなす極めて普通の日常生活を綴ったものに過ぎない。

夏もとうに終り、秋の気配があちこちに見え始めた頃。
残暑もあっと言う間に去ってしまい、涼しげな風が肌に心地よさを感じるようになっていた。
「ふう、やっと真剣に蒸し暑さから解放されたって感じだな」
庭で大きく深呼吸をしてから、浩之がしみじみと言った。だが、それを聞いたマルチは

今ひとつ分からないような表情を見せる。
「そんなに違いますかー？」
そんな問いに浩之は大きく両手を上げながら、わずかに苦笑しながら返す。
「マルチには分かんないかな？　この陽気って言うか、秋の爽やかな風って言うか、そんなものがさ」
「うーん……よく分かりません…」
わずかに眉を寄せて悩むマルチ。見ようによっては、悩んでいると言うより困ったような表情にも見えるが、いずれにしろ可愛いしぐさには違いない。
「でも、蒸し暑い季節がやっと終わったってのは、実感できないか？」
「うーーーん…わたしたちロボットは、湿度もある程度の範囲であれば特に問題になりませんから……わたしは暑いのが苦手って言うだけですけど……」
「そっかぁ…。でも、その暑いのももう気にしなくてもいいんじゃないか？」
「それはそうですねー」
と、そこでマルチの表情に笑みが浮かぶ。
「そう、それそれ。その『やっと鬱陶しい季節が終わったー」ってな表情が、こんな秋の日には合うんだよ」
マルチの笑みを見て、浩之がカッコつけながらそんなことを言ってるところに、バッグを片手に提げたセリオが姿を見せた。
「浩之さんに風流って言うか、季節を感じる心があったなんて、ちょっと意外ねぇ」
買い物から帰ってきたところなのは疑いようもない。スーパーのビニール袋ではなくて、

出かける時に持っていった大きめのトートバッグに野菜やら精肉やらを詰め込んでいるのは、省資源のためでもある（スーパーのビニール袋もこうしたちょっとしたことで減らせるはず。昔はみなお母さんたちはそれぞれに買い物カゴなり買い物袋なりを持っていたもんだが…）が、帰ってくるなりのその言葉に浩之はムッとした表情を見せるのだった。

「そんなに俺が鈍感だとでも言いたいのか？」

だが、そんな浩之にセリオはコロコロと笑いながら、あっさりと切り返す。

「だって浩之さんは夏の間じゅう、『セミがうるさい』だの『ラジオ体操は安眠妨害』だの言ってたじゃないの」

「う、うるさいものはうるさいんだよ！」

「じゃ、風鈴の音は？」

「う……」

「あれも『耳につく音だな』って、せっかくマルチがもらったのに外しちゃったじゃない」

「あ、あれは…昼寝の時に限って、鳴るもんだから…」

「マルチはちょっと落ちこんでたのよ？」

「それはいいんです、セリオおねーさん」

「うう……」

あっと言う間に形勢不利になってる浩之だったが、セミにしろ風鈴にしろ、それは日本の夏の風物詩であり、何も全然理解してないはずはない。ただ、それらの場面が自分の意にそぐわなかっただけだ。

「そんなことなら、マルチやわたしの方がよっぽど季節に敏感よね」
しかし、セリオのひとことが浩之にとどめをさした。
「な、なにぃ？」
「そうなんですか？」
きょとんとした表情でセリオに尋ねるマルチと、明らかに不機嫌な様子を見せる浩之の表情が、見事に対照的だった。
「でも、さっきマルチは秋の爽やかさってのが分からないって言ってたぜ？」
浩之がすぐに反撃を試みる。が、セリオは相変わらず余裕の表情のまま。
「それはとーぜんじゃないの」
「何で？」
「マルチの中では具体的な定義づけをされてないんだから、どの程度がそれに当てはまるのか言えないだけだもの」
「…何だ、そりゃ？」
浩之には、どうにもセリオの言ってる意味が分からない。怪訝そうな表情でつぶやくように尋ねると、セリオもわずかに困ったような笑みを見せた。
「でも、今のできっちりと基準ができたでしょうから、もう一度同じ質問してもいいわよ」
「……何で？」
「いいから」
相変わらずセリオの言いたいことが分からなかったが、言い切られてしまっては、それ

に従うしかない。そんなところは素直な浩之だったりする。
「んじゃマルチ」
と、言いながら浩之がマルチの方を向くと、マルチも短くそれに答える。
「はい」
「今日みたいな陽気はどんな感じ？」
まだ浩之は怪訝そうな表情を隠せなかったがマルチの返事は、そんなものを簡単に吹っ飛ばす威力がありそうな満面の笑みとともに浩之に返されるのだった。
「はいっ、とっても爽やかでいいお天気ですー」
「……」
浩之は何も答えられない。「目が点」になっている…とでも言う表情のまま固まってるだけだ。
と、そこにセリオが首を少しだけ倒すようなしぐさをしながら、浩之にひとことだけ。
「でしょ？」
その時になって、浩之はようやくセリオの言いたいことが理解できた。
（そっか、マルチは学習型なんだっけ…。俺が「爽やかな陽気」ってのをこれでマルチに教えたってわけなんだな？）
「……なるほどね。で、セリオはどうなんだ？」
納得した表情を見せながら、浩之がセリオに聞き返すと、今度はセリオが少しだけ怪訝そうな表情を見せた。
「わたし？」

「ああ」
浩之はセリオの問いに短く答えると、そのままじっとセリオを見つめている。その質問の意味はもちろんセリオにはすぐ分かっていたし、いい加減な答えでは浩之が納得しないことも、浩之の態度から十分感じられた。
そして、右手をすっと口に当てるようにしながら、セリオは視線を浩之からずらして喋りだした。見ようによっては、わざとはぐらかしてるようにもとれる。
「そーね…、もうちょっと涼しくなると、もっと秋らしいと思うわ」
「…何かうまくごまかしてるよーな気もするな」
浩之が感じたままを言うと、セリオは別段普段と変わりない調子で返す。
「他にどう言えばいいのかしらね？　だいいちマルチと同じ言葉だと、浩之さんはなおさら納得しないでしょ？」
セリオの言うことはもっともで、実際に浩之はマルチと同じ言葉では納得しないつもりでいた。もちろん、そうしてセリオを困らせてやろうと言う魂胆だったのも事実である。
しかしながら、ふとセリオの「季節感覚」について興味がわいてきた。
「まあ、そりゃそーだけど。セリオにはその辺の判定基準ってのがあるのか？」
「ふふふ、内緒」
「おいおい、そりゃないだろ？」
あっさりと「内緒」と言われて、情けない表情を見せる浩之だが、そんな表情を見せられてしまっては、さすがのセリオもそれで答えないわけには行かないらしい。わずかに呆れ顔を見せながら、

「ある程度はちゃんと基準があるわよ。でも、それがすべてじゃなくて、その時の状況に応じて変化するから、一概には言えないもの」
と、ようやくセリオがきちんと説明したのだが、浩之の反応はあまり芳しくはなかった。
「何だか、ますます胡散臭くなってきたな…」
それが本当の説明なのか、それともセリオの方便なのか。浩之は一層判断に苦しんでいる。
「最近性格が変わったわね、浩之さん」
眉間にしわを寄せる浩之を見て、セリオが苦笑混じりにそう言っても、
「ほっとけ」
とひとことだけ。そこにマルチが口を開く。
「浩之さん…目つきが……ちょっと怖いですー」
両手を口に当てながら、少しだけ何かに怯えるような…そんなマルチを見て、浩之はさらなる沈黙の後にひとこと。
「……ほっとけ」
その日、それ以後の会話がどうなっていったのかを語ると冗長になってしまいそうなので結論だけを言ってしまうと、「機会を見て紅葉狩りに行こう」と言うことになった。
何故紅葉狩りなのかと言うと。
とにもかくにも、「秋の風情とは何ぞや?」と言うことを、マルチやセリオが実際に分かってるのかを、試そうと言うわけだ。言い出したのは浩之の方でセリオは「そんなことはしなくても、秋はやってくるわ」などと言ったのだが、結局はマルチが浩之に従ってし

まい多数決で二対一…行くことに決まったのだ。
そして、その紅葉狩りの当日。
その日は朝から天気がよく、絶好の行楽日和ではあった。ただ、紅葉狩り日和であったかと言う点についてはいささか問題があるかも知れない。
「浩之さん、紅葉狩りに行くのはいいけど、まだ時期は早いんじゃないかしら？」
「だから山の方に行くんじゃないか」
十月ではまだ本格的な紅葉の季節ではない。それは浩之も分かっていたが、言い出した手前もあって、あまり時間を置きたくはなかったのだ。それゆえに浩之は今回の紅葉狩りのロケーションに、少しでも紅葉が見られるはずの山の方を選んだ。
「それはいいんだけど…その厚着は何かしら？」
と苦笑しながらセリオが指摘したのは、まだ着るには早そうな厚めのフィールドコートを着ていたからだ。
「山は冷えるかも知れないだろ？」
そんな浩之の重装備に比べると、マルチとセリオは極めて軽装だった。そもそもロボットなのだから、防寒装備など必要ない（低温ではバッテリー性能の低下や潤滑油の硬化などで各部の挙動に支障を来す恐れがあるが、通常はまず問題ないのだ）とも言える。
しかしながら、セリオはセリオでちょっと大きなバッグを肩に掛けており、少なからず浩之の興味を引いた。
「それより、セリオは何持ってんだ？」
「雨具と救急セットとマルチの予備バッテリーよ」

「ふーん…。マルチは？」
さらっと答えたセリオの言葉の意味を、理解していないのかあるいは分かった上で言ってるのか、浩之はあまりセリオの方を気にしてない様子で、続けてマルチにも聞いた。
「あ…わたしはお弁当だけですー」
「そっかぁ…、それじゃセリオの荷物は俺が持つよ」
セリオの荷物の方が重いと言うことだけは、浩之にも分かったらしく、いかにも浩之らしい提案をしてくれたのはありがたいが、セリオは苦笑を見せるだけだ。
「結構重いわよ」
「そーか？」
とセリオの忠告を横に聞きながら、浩之がセリオのバッグを持ち上げようとした時。
「……げげっ」
思わずそんな言葉を出してしまう浩之だった。そう、そのバッグの重さは浩之の想像を遙かに上回っていたのである。
「でしょ？」
「何が重たいんだ…って、そうか、バッテリーか…」
「うう…すみません…」
一番重たい物が何かを悟って、何気なく口に出してしまったが、マルチのすまなそうな言葉を聞いてすぐに浩之は後悔した。
「そう言えば、今まで遠出した時って言えば、いつもパパさんが一緒だったから、この辺の心配は全然してなかったっけな」

『アクア』（『新ロボ耳２』参照のこと）は近場であったが、その後海水浴に行った時（これは未出のイベント。『新ロボ耳２』のラスト部分では、それを匂わしていたのだが…）にしろ、遠出をする時はパパさんこと山本が研究所の車（メンテナンスカーである）を出していたので、マルチのバッテリー問題や何かあった時の処置は全然気にしていなかった。

今回は山本には全然話をしていないし、どのみち日帰りで行くのだから、そんなに大げさにすることもなかったからだ。

ちなみに本来マルチには燃料電池と言う予備電源がある。本シリーズではあまり使った場面がないように思われるが、これは使用時の排水やコスト面の問題から使われることがほとんどなく、今は普通の二次電池に置き換えられているのであって、決して作者が失念していたわけではない。なお、セリオのバッテリーについては、このシリーズでは一環してる設定があるので、ここでは問題外となる。

「まあ、浩之さんにはマルチが動けなくなったら、おんぶしてもらうことになるんだから、この荷物はわたしが持って行くわよ」

予備バッテリーとマルチ本体とでは、当然ながらマルチ本体の方が重い。ゆえに、セリオの言い分は浩之にとっても納得できるものだった。

「何か悪いな、セリオ」

「セリオおねーさん、それに浩之さん…、本当に申しわけありません……」

「気にするなって。それじゃ行くか」

放っておけばまたうつむいてしまいそうなマルチに向かって、浩之は元気に声を掛けて、

ぽんと軽くマルチを押し出すようにしてから歩き出した。
秋を見つけに行く…と言えば、それだけでどこか風流のようなものを感じてしまうところだろうが、その道のりは遠かった。
電車に揺られ、バスに揺られること、数時間。
やっと目的地に到着したのはいいのだが、「山は冷えるだろ？」と言った浩之の予想を裏切るように、乗り物に揺られている頃からずっと浩之は暑さに参っていた。と言うのも、荷物が増えるのを嫌って、浩之は移動中ずっとコートを着たままでいたのだ。ぶつぶつと文句を言いながらではあったが。
そして、こうして山に着いてなお。
「暑い」
と不平を漏らす。
「大丈夫ですかー…」
「だから、厚着しすぎって言ったのに…」
表情だけならマルチもセリオも同じように「困ったような心配そうな」ものだが、その言葉はまるで違う。
「…今は十月だぞ？」
「十月としては観測史上最高を更新し続けてるって話よ」
「……何故それを早く言わないんだよ…」
「言ったじゃないの。もう少し涼しければ秋らしいでしょうねって」
「山に行けば涼しいだろうって思ってたんだけどな…。まあ、とにかく目的地には着いた

んだ。早速セリオの秋ってのを見せてもらおうかな？」
この調子でセリオにまたあれこれと言われるのも釈然としなかったので、浩之がさっと本題を切り出したものの、それもあっさりと返されてしまう。
「来る早々そんなことを言ってるようじゃ、風情も何もないわよ、浩之さん」
「うっ…」
そればかりか、マルチも周りを見回しながら楽しそうに言ってくる始末。
「まずは景色のいい場所を見つけて、お昼にしませんかー？」
（うう、マルチまで……）
こうなってしまえば、浩之が一人で息巻いたところでそれは無駄な抵抗と言うものだ。まさに出ばなをくじかれてしまったのだが、それでも浩之の食欲は正直だった。
（…でも、確かに腹も減ってきたな）
そのようなわけで、少し開けた場所を見つけて、そこでお昼に。
暑い日と言え、それでも十月の日差しは心地よい。浩之はコートを脱いで、セリオたち二人が作ってくれたお弁当をゆっくりと味わいながら、体を撫でるような秋の風に身を任せていた。
「ふうぅ…、涼しくていい気持ち…」
すると、その様子を見ていたマルチが微笑みながら、小さなタオルを浩之に差し出した。
「汗をかいてますから、そのままにしておくと、風邪をひいちゃいますよ」
「ん、そうだな」
とマルチが差し出したタオルを受け取って、浩之が肩や首の辺りの汗を拭き始めると、

すぐにタオルは湿り気を帯びていた。どうやらかなりの汗をかいていたらしい。
先ほどから黙っていたセリオも、そんな浩之の様子を見ながら、ようやく口を開く。
「季節って言うのはこっちから探しに行かなくても、どこでも感じられる、そうでしょ？」
すると、浩之はタオルをマルチに渡しながら、渋い表情を見せた。
「……いーーや、約束は約束だからな」
「それじゃどうするの？」
浩之の意固地な部分にセリオは苦笑を隠せなかったが、それを気にすることなく浩之が提案をする。
「うーん、それじゃお互いに『秋らしさ』を感じるものを探して、それを見せて決めようじゃないか」
「浩之さんがそうしたいんなら…」
セリオは苦笑と言うよりも、すでに困り顔になっている。が、やっぱり、浩之はそれには触れようとしない。
「よし、決まり」
「あ、マルチはどうするの？」
「俺と一緒にいればいいだろ。これは俺とセリオの勝負なんだし」
今のところマルチのバッテリーについての不安はなさそうだったが、マルチが動けなくなったら自分が背負ってやればいい、そう思っての浩之の言葉ではあるのだが、その後半部分が引っかかる。

「勝負、ね……。それじゃわたしはマルチの位置をトレースしておくから」
いつの間にか「勝負」になっていることにセリオはまた苦笑いを見せて、それでも浩之の意向に従うことを告げる。
なお、セリオの言う「トレースする」とは、徘徊老人保護対策としてメイドロボットが標準で持っている機能の一つであるが、その詳細についてはここでは割愛させていただこう。
「あ、そうそう。これはマルチが持っていた方がいいでしょ」
と、セリオはふと思いついたように言いながら、マルチに渡したのは浩之の雨具として用意してあったレインジャケットの袋であった。
「はい、それじゃ預かっておきますね。でも、セリオおねーさんはどっちに行くんです？」
とマルチが尋ねたが、セリオが答える前に浩之はマルチの手を引いて、
「おいおい、そんなことを聞いてたら勝負にならないぞ、マルチ」
とさっさと歩き出してしまった。
「あっ、あの、浩之さん……。あの、それじゃセリオおねーさんも頑張ってくださいね」
手を半ば強引に引かれながら、マルチは浩之とセリオを交互に見比べた後、セリオに向かってそれだけ告げて、浩之とともに木々が立ち並ぶ方へと消えて行った。
浩之とマルチの二人を見送る形になったセリオは、
「やれやれ…こんなとこまで来なくても、秋はいっぱい溢れてるのに。本当に困った人なんだから…」

と、呆れながらもどこか楽しげにそっと笑みを浮かべるのだった。
一方、勇んで林の中に踏み込んで行った浩之たちは。
「紅葉狩り…って言う割には、紅葉がねーな…」
「やっぱり早かったんでしょうか」
周りの木々を見て回ったが、まだまだ紅葉と言うには早いと言う事実を語るだけで、鮮やかな赤や黄色のグラデーションを見せてくれることはない。
「まあね…。でも、それじゃセリオにまた頭が上がらないからなぁ…」
必死になって周りを見回す浩之を前にして、マルチは困り顔を見せるばかりである。
「浩之さんもそんなにむきになることは…」
だが、そんなマルチの言葉も浩之の気に障ったらしく、思わず浩之の口からつぶやきのように漏れたひとこと。
「…マルチはセリオの味方なのか？」
そんなことを言われてしまっては、マルチは一層困り果ててしまうだけだ。
「味方とか、敵とか、そんなことは……」
所在なさげに手を組み、うつむいてそれ以上言えなくなってしまう。と、その姿を見て、ようやく浩之はマルチにつまらないことを言ってしまったと気づく有様だった。いつもの浩之なら、そんなことはしないはずなのだが、それだけ躍起になっていたと言える。
「……悪かったな、マルチ」
しばらくの沈黙の後、浩之が優しく告げる。そして、それにマルチも。
「いいえ……あれ？」

が、ふとマルチが何かに気づいたのか、視線を浩之からすっとずらして、低い木の茂ってる方をじっと見つめた。
「うん？　どうした、マルチ」
きょとんとした表情の浩之がマルチに声を掛けると、マルチはまだ何かに集中してるらしい。
「あっ、浩之さん、聞こえませんか？」
「聞こえるって、何が？」
と浩之が聞き返すのが早いか、マルチが浩之の手を引っ張って茂みの方に歩き出すのが早いか。とにかくマルチは浩之を茂みの方に案内して行った。
「こっちです！」
「おいおい？」
怪訝そうにする浩之とは違って、茂みの下の方を何かを探すように見ていたマルチが突然嬉しそうに声を上げた。
「わぁっ、浩之さん、虫さんですよ」
その声に浩之もマルチの視線の先を追うと、確かにそこには何匹かの虫の姿があった。と同時にリリリリ…と虫の音も。
「…コオロギか何かか？」
「みたいです」
「こんな真っ昼間に鳴くもんだっけ？」
「よく分かりませんけど、やっぱり虫の音っていいですよね」

その言葉とともに、マルチは本当に嬉しそうな笑みを浩之に向けた。いつもなら、浩之もそれに合わせるように笑い返すところだが、今回はそうは行かなかった。
「うっ……」
いきなり険しい表情になって言葉に詰まってしまったのだ。
「どうしたんですか？」
浩之の表情を見てマルチが尋ねると、浩之はぼそりとつぶやくように
「いや、マルチにも先を越されたよーな…」
と答えたのだが、それでもまだマルチはよく分かってない様子だ。
「？」
きょとんとしているマルチの表情を見て、観念したように浩之はがくりと肩を落としてつぶやいた。
「虫の音…なんて、まさに『秋』って感じじゃないか…」
そこまで言われてようやくマルチにも浩之の表情の理由が分かった。何のことはない。マルチが気づいた虫の音についても、浩之はそれを「いいな」とかまだ言ってなかったのだ。つまりは、セリオの言う通りに「浩之よりもマルチやセリオの方が敏感」だったことを証明してしまったのだ。
「あっ…」
「ううう…」
「浩之さん…」
しかし、浩之はそこで終わる男ではなかった。

「うう、くそっ、こうなったら意地でも紅葉を持ってくぞ。別に赤くなってなくてもカエデとか持ってくぞ。そもそも今回は紅葉狩りなんだからな！」

さっきよりも一層意固地になってしまっただけ…と言えばそうだが、何ごともあきらめないと言うのは割と大事なことである。とにかく、浩之は決意を新たにして、その勢いのままずんずんと歩き出してしまったのだ。

「あっ、浩之さん、待ってくだ……あっ！」

が、それに追いつこうとマルチが足を出した時、ちょっとしたでこぼこに足を取られて、でーんと派手に転んでしまった。

「マルチ！」

悲鳴と言うと大げさだが、マルチの小さな叫びを耳にして、浩之は急いで駆け寄ってマルチを抱き起こす。

「マルチ、大丈夫か？」

「は、はい…。でも、浩之さんの雨具が……」

と足に土をつけたまま、マルチがすまなそうに両手を見せる。さっきまでは確かに雨具を持っていたはずなのだが、転んだ拍子に手から離れてしまったらしい。

「なに、これだけ天気がいいんだから、雨の心配はいらないさ」

マルチを立たせてから、足や服についた土を払いながら浩之が笑うが、マルチの方は暗いままだ。

「…でも、お昼から気圧が下がってきてますけど……」

「い？」

「気温が高いですし……」
「おいおい？」
マルチにしては珍しく合理的な意見を述べている、と浩之は面食らってしまったが、いつの間に現れたのか遙か頭上に分厚い雲があることに、その時になって気がついた。
そして、マルチが
「もしかしたら……」
と言った途端、まるで合図を待っていたように、突然激しい雨が降り出した。
“ザアアアアアァァァァァァ…”
「うわっ！」
「あっ」
「こりゃすげえ…。とにかく雨を避けないとな」
と言いながら、浩之は周りを見回した。ちなみにコートはセリオと別れた時に置いてきてしまっている。暑くても着ていればよかったと、この時は心から思ったが、後悔先に立たずである。
「浩之さん…大丈夫ですか？」
「俺のことはいいから。それよりも、ちょっと走るぞ！」
「あっ…はいっ」
いきなりの土砂降りで、あっと言う間に浩之もマルチも濡れてしまったが、それでも、雨を避けられるような場所を探してしばらく走り回ってると、大きな岩がオーバーハングしてるような場所を見つけた。そこならとりあえず雨は避けられそうだ。

「ひとまずここで雨足が弱まるのを待つとするか…」
「すっかり濡れちゃいましたね…」
そう言いながらマルチがスカートの裾を軽く絞ると、水滴がぽたぽたと垂れていく。浩之の方もすっかり濡れてしまっているが、
「ああ、でもそんなに寒くはないさ」
と言いながら、ポンとマルチの頭に手を置いた。だが、頭に置かれた浩之の手を、マルチはそっと両手で握りながら真剣な表情で返す。
「でも、濡れた服はそのままにしない方がいいです」
「そうは言ってもなぁ…ぶぇしっ！　…あれ？」
「ほら、体が冷えてきてるんですよ、浩之さん」
そう言いながらマルチは、浩之の手をそっと自分の胸元で包み込むようにした。すると、確かに浩之にはマルチの手や体が暖かく感じられたのだ。
「でもなぁ……くっ…ぶぁしょっ！」
自分の体が冷えていることは、マルチと比較しても分かることだが、くしゃみが連発すること自体が、その証拠に他ならない。それを改めて認識した時、浩之の体が大きく震える。
意識しなければ結構平気でいられる、と言うのは人間ならではの話である。こればかりはマルチを責めることはできないが、ことさらマルチが「冷えている」と言わなければ、浩之はまだ平気でいたかも知れない。が、一度意識してしまうと、やせ我慢を続けるのにも限界があろう。

「何か……本当に寒くなってきた…」
と、浩之が体を丸めるようにした時、激しい雨の中から、セリオの声が届いた。
「どうしたの、マルチ！」
「セリオおねーさん！　こっちですー」
もともと正確な位置が分かっていたのだが、マルチの声を聞いたのと同時に浩之たちがいた岩の影にセリオは姿を見せた。
「あら？　二人ともびしょ濡れじゃないの。雨具はどうしたの？」
と言うセリオも当然ずぶ濡れである。相変わらず肩にはバッグを掛けているが、そのバッグだけは浩之のフィールドコートをかぶせてあった。
「…わたしが落としちゃったんです……ごめんなさい…」
「いや、マルチは悪くねーよ、俺が急かしたから悪いんだよ」
「どっちにしても、そのままじゃ浩之さん、風邪ひいちゃうわね」
セリオはそう言うと、バッグからタオルを何枚か出して、濡れてない岩の上にそれを敷いた。激しい雨にも関わらず、バッグの中身は浩之のコートのおかげで濡れていなかったのだ。
「ちょっと冷たいと思うけど、まずはここに座ってくれる？」
と浩之をその岩の上に座らせたかと思うと、頭の方にタオルを優しく置いた。
「で、何すん……おわっ？　セリオ？」
ひとまず自分で髪の毛を拭き始めた浩之が声を上げたのは、目の前でセリオがいきなり上着を脱いだからだ。だが、セリオはそんなことには全然構わない様子で、マルチに向

かって言った。
「マルチも上着だけ脱いでちょーだい」
「はいっ」
マルチにしては珍しくとでも言うのか、恥ずかしそうにはするもののセリオの言葉に従っている。
「おいおい…」
そうこうしてるうちに、二人とも下着だけになってしまった。そして、セリオは浩之のフィールドコートの水をばっと払ってから羽織り、そのまま浩之の背中にそっと体をくっつけた。
「浩之さんはマルチを抱えるようにしてくれる？」
ちょうど浩之の耳元からセリオの声がする。
「何でそんな…」
浩之がためらっていると、マルチは顔を赤らめながらも浩之の前に座り込みそっと体を寄せてきた。
「こーゆー場面ではね、メイドロボットをヒーター代わりにして、冷えた体を暖めるのよ。それと、濡れた服を乾かすのものね」
「って言われても…」
前後を囲まれてなんて状況は、嬉しいやら苦しいやら…。さすがにこんなところで、しかもこの状況で本能に従うのだけは回避したい。
（そうそう、いくら俺でも、こんな状況で……って、おい、これはやっぱり嬉しすぎだ

ぜ……。いやぁ、生殺しに近いかも……）

と浩之が自分の置かれてる状況に苦悩していた時。

「こんな感じかしら？　あんまり熱くすると低温やけどしちゃうし…」

また浩之の耳元にセリオの声が届く。が、それがさっきとは微妙に違う。熱いのだ…と言うと、何やら話の方向が変わってるようにも思われるかも知れないが、その時浩之はその理由を瞬時に察した。

（セリオもマルチも、温度を上げてるんだ……）

それは別に興奮したからでもないし、密着してるからでもない。浩之の体を温めるためだけなのだ。と同時に、マルチがやってきてから初めての過熱騒ぎのことを思い出していた。

（長時間の過熱運転はよくない…んだろ？　あの時ほど熱くはないにしても、マルチはもちろん、いくらセリオだって全然平気ってわけじゃないだろうに）

浩之が黙っていると、今度は浩之の前後から声が届く。

「どお？」

「どうでしょうか、浩之さん」

二人の問いに浩之はすぐには答えられなかった。

「秋を探す」なんて躍起になったあげくに、セリオやマルチにも感じられたことに気づかずにいた自分。

つまらないこだわりで、結局二人に世話を焼かせるばかりの自分。

（情けないよな……ホントに）

そう思った時、それまで躍起になっていたことも非常にばかばかしく思えてならない。
（何をむきになってたんだろ……）
そして、しばらくの沈黙の後、ようやくぽつりとひとこと。
「……暖かいよ」
「そお、よかった」
セリオの言葉には、嫌みも何も感じられない。それゆえに、浩之はさらに自分を責める。
そして、さらにしばらく後。
「……なあ」
浩之はぼそっと言うと、マルチとセリオの二人もちゃんと反応してくれる。
「ん？」
「何ですか？」
だが、その後も数分かあるいは数十秒かの、沈黙が続く。
雨は相変わらず降り続け、激しい雨音に何もかもが包まれているような、そんな空間にあって、正確な経過時間など無意味だったのかも知れない。
やがて、浩之がぼそっとつぶやいた。
「……いや、何でもないよ」
「変な浩之さんね」
その時のマルチの表情は不思議そうな表情で、返事をしたセリオはクスッと笑いながら。
浩之には両方とも見えていなかったはずだが、二人の表情は容易に想像できた。
そして、再び長い沈黙の後、浩之は小さな声でつぶやいた。

「……さんきゅ、な……」
今度は返事も何もなかったが、やはり浩之には二人がどんな表情をしてるのかが分かっていた。それは、優しい微笑みであった。
それ以後、浩之もマルチもセリオも何も言わずにただ時間だけが過ぎて行き、やがてあれだけ激しかった雨もぴたりと止んでしまった。
「それにしても『乙女心と秋の空』ってのはホントだな…」
セリオたちのおかげですっかり服も乾いた浩之は、雲が消えた空を眺めながらつぶやいた。すると、セリオがそれを訂正する。
「浩之さん、それって『男心と秋の空』じゃなくて？」
なお、セリオとマルチの方はまだ上着が濡れていたが、濡れた服を着ていても特に支障があるわけでもない。それに、着ていた方が早く乾くのだ。強いて問題があるとすれば（上着が濡れているので）、下着が透けて見えるくらいだろうか。
「ははっ、俺はそんなに心変わりなんてしねーし、どうせなら女の子の方がいいじゃないか」
「…よく分からない理由ね」
「まあね。でも、その方が『秋らしい』じゃないか？」
移り気な男を連想するよりは、気まぐれな女の子の方が「秋」のイメージに近い…そう言う意味で浩之が言ったのだが、それはセリオにも通じたらしい。
「そうかも知れないけど」
「だろ？」

「理屈はいらない…ってことね」
「そうそう」
と浩之とセリオが話してるところに、マルチがおずおずと切り出してきた。
「あのー、浩之さんはもうセリオおねーさんと競争するのは……」
「ん？　ああ、マルチ、やめたよ」
浩之があっさりと答えると、マルチはパァッと明るい笑みを浮かべた。実にマルチらしい分かりやすい反応である。
「本当ですかー？」
「ああ、だってそんな風に張り合って探すもんでもないだろ？」
「そうですねー」
嬉しそうにするマルチと少し照れてるような浩之を見て、セリオも笑みを浮かべる。
「ふーん、浩之さんもやっと分かってくれたみたいね」
「ちょっとばかりくやしい気もするけどな。でも、そんなことはどうでもいいや」
「そう？　それなら、家に帰ったら、もう一つだけ『秋』ってのを教えてあげる」
セリオはそう言うと何やら楽しそうに含み笑いをしてみせる。
「何だい、そりゃ」
「今はまだ内緒」
「楽しみですねー、浩之さん」
と、早すぎた紅葉狩りの一日はこうして終わる。
本格的な紅葉そのものは全然楽しめなかったものの、浩之はもっと大事なものをたくさ

ん見たような気がしていた。
季節を感じるのは、日常の何気ないことがらに溢れていること。それさえ分かっていれば、むきになって探す必要などないこと。そして、セリオとマルチはそれを知っていたと言うこと。
まだ秋はこれからかも知れないが、浩之は小さな秋のサインにも気づくことだろう…。
さて、教訓は教訓として置いておくとして、セリオが言った「秋」についてはっきりしたのはそれから数日後のことだった。
浩之が自宅に帰ってくるなり、セリオがやってきて
「お帰りなさい。ちょうどよかったわ」
と告げた。
「ん？　ちょうどいいって何が？」
一体何のことか見当がつかない浩之をそのまま庭の方に連れ出しながら、
「この前に話してた、もう一つの『秋』よ」
とセリオが言うと、ようやく浩之もその話題を思い出した。
「ああ、あれか…。で、それを見せてくれるってのか？」
「ええ、そうよ」
セリオが浩之を連れて庭に行くと、焚き火のあとがあるくらいで特別に浩之が目を引くようなものはなかった。
「セリオ？」
と見回してみてもやっぱり分からない。しょうがないので、そのまま台所にいたマルチ

にも聞いてみようと思って、ダイニングの窓を開けた時。
「はいっ、浩之さん！」
と後ろからセリオのかけ声が響いた。
それに応じて、浩之がセリオの方を向くと、セリオが何かを浩之の方に投げたところだった。
「おわっ？」
反射的に浩之がそれを受け取ろうと手を出した時、セリオはにっこりと微笑みながら言った。
「熱いから気をつけてね（ハート）」
その言葉の意味を理解する前に、それは浩之の手に触れた。
「え？　わっ！　アチチッ…」
と慌てふためく浩之の声に誘われたのか、ダイニングの窓からエプロン姿のマルチが姿を見せた。
「セリオおねーさん、それって何ですか？」
マルチの質問と同時に、自分の手の中に入ってきたそれをお手玉状態で何とかしのぐ浩之の怒号にも似た声が重なる。
「おい、セリオっ！」
「やっぱり、秋と言えば、おいしい焼き芋でしょ？」
そう、浩之がお手玉をしていたのは、アルミホイルに包まれた甘藷…サツマイモだったのだ。

「妙に達観した季節感を持っていたり、こんなことしたり……。お前のその感覚って、一体誰が仕込んだんだよ……セリオォォォォ！」

「さあ？　そんなこと、どうでもいいじゃないの」

自分の慌てふためいてる様とは裏腹な、楽しそうに笑うセリオの表情を見た時、浩之はつくづく思うのだった。

（やっぱり、秋だろうが何だろうが、俺には安息の日々はないんだな……）

…そりゃ、これだけの果報者である浩之が、平安な日々など送れるはずがないに決まってるではないか。

（あぁぁぁぁ…）

何にしろ、そんな喧噪もまた、藤田家にとっては普通の「秋の風景」でしかないのだから。そして、それはこの先も変わることはないだろう。

このシリーズも回を重ねるごとにセリオの性格が破天荒になっていったり、毎回作品の構成が違っているなど、支離滅裂な要素も多分にあるものの、このシリーズを通して最大の被害者（果報者とも言うが）である浩之君に、合掌。

（了）

あとがき

ふとしたいきさつでえらく落ち込んで、それが解決して、その回復期の上昇曲線に乗って一気に書き上がった…そんな作品です。

ここまでくると、作者もこの作品が本当に面白いのかどうなのか、よく分かっていません。もしかしたら、悪のりしてるだけかも知れない…などと、怖い考えばかりが浮かんできてしまうのですが、いかがなものでしょうか。

それと、ふと思ったのですが。

このシリーズはだいぶ浮き沈みの激しい作品であると思うのですが、これまでのエピソードの中で、どれが一番面白かったでしょうか？　作品と言うのは何であれ「前作よりも面白く」と言う無言の要求があるもので、果たして自分はそれが叶ってるのだろうかと疑問に思うことしきりです。

今後のこのシリーズのためにも、無理でなければご意見などお聞かせください。

ａｓｈ

書出:1998/10/20
初版:1998/11/10
PDF書式変更:2016/05/11